スペイン・エスコリアル修道院藏『三國志演義』について

井上泰山

一　はじめに

近年、中國及び日本に於て、『三國志演義』の版本をめぐる論議が活發になり、それに相呼應する形で、中國國内のみならず日本・イギリス・ドイツ・アメリカなど、世界各國に散在する各種の版本が影印出版され、研究のための基礎資料は急速に整いつつある。

『三國志演義』の版本に關して、それが從來考えられていたほど單純なものでなく、『水滸傳』の版本同様かなり複雜な側面をもつことを示唆した論考は、一九六三年の「關索の傳説そのほか」（小川環樹、岩波文庫『三國志』第八冊附録）が最初であったが、當時は提起された問題に對して適確に回答しうるだけの充分な資料に乏しく、それを受け繼いで發展させる論考はにわかには現れなかった。ところが、四年後の一九六七年、全く偶然にも、上海市近郊の一墳墓から明代成化年間に出版された語り物のテキスト『花關索傳』が發掘されたことによって、『三國志演義』

の版本をめぐる論議はにわかに沸騰し、[1]以來今日まで、各種版本を比較して互いの刊刻時期の先後を定め、その系統を整理する作業が進められるとともに、羅貫中の原本の姿に迫ろうとする試みが様々な角度からなされつつある。[2]

現段階ではまだ、これぞ羅貫中の原本と明言しうるだけの版本は發見されていないが、それでも『三國志演義』版本の研究はかなりの進展をみせ、現存する版本のうち最も刊行年の早い嘉靖元年（一五二二）序刊本、所謂「嘉靖本」こそが羅貫中の原作に近いものである、といった從來の定説[3]は既に覆されているし、[4]また、相異なる様々な版本の存在そのものが、小説讀者の教養の程度や出版書肆の販賣競爭意識と密接に關わっていたことも次第に認識されはじめ、小説の版本の研究が明代の文化・社会を理解するための重要な糸口として注目されつつある。[5]

本稿は、そうした動きを承けて、これまで存在自體は知られていながら充分な調査がなされなかった、マドリッド郊外のエル・エスコリアル修道院[6]に十六世紀以來所蔵されている『三國志演義』の一版本について調査を行ない、書誌や流入經路に關する基本的事實を確認するとともに、從來提起されてきた版本史に關わる幾つかの問題につき、本書の調査結果を報告しようとするものである。

後に詳述するように、この版本は福建の書肆葉逢春によって刊行されたもので、巻首には元峰子なる人物による嘉靖二十七年（一五四八）の序文が附されている。從って、これまで存在が確認された版本の中では「嘉靖本」に次いで二番めに古く、『三國志演義』の版本研究を進める上で缺くことのできない重要な資料であることは疑いない。

以下、章を分けて、本書に對する調査の歴史、書誌、エスコリアル修道院流入の經緯、版本史上の位置付け、等について述べるが、所謂「嘉靖本」との區別を明確にするため、本稿ではエスコリアル修道院に収藏されている『三國志演義』の版本を「葉逢春本」と呼ぶことにする。

二　「葉逢春本」の書誌及び流入の經緯

(一)　先人の調査

「葉逢春本」について實際に調査し、その存在を指摘した人物としては、いま、三人の學者の名前を擧げることができる。即ち、フランスのポール・ペリオ、中國の戴望舒、臺灣の方豪の三人である。

ペリオはかつて、マドリッド及び近郊の幾つかの圖書館に收藏されている漢籍について調査し、一九二九年、當時みずから主編の任にあった東洋學關係の專門誌『T'OUNG PAO』(『通報』)第二六號誌上に、「スペインに存在する幾つかの書物と文獻」(原題「Notes sur quelques livres ou documents conservés en Espagne.」)と題する報告を書いた。それには、エスコリアル修道院で見た漢籍六種(7)のうちの一に『三國志』が含まれていたことが記されている。しかし、その記述は極めて簡單なもので、「葉逢春本」が十六世紀の繪圖本であり九部九卷存在することを述べるに止まり、書誌等についての詳しい報告は一切見られない。

戴望舒はスペイン内亂勃發(一九三六年)の直前にマドリッドとエスコリアルを訪れ、一部の漢籍の目録と數葉分の書影を中國に持ち歸っている。調査報告は「西班牙愛斯高里亞爾靜院所藏中國小説・戲曲」という題目で書かれ、死後八年經って、遺稿集『小説戲曲論集』(呉曉鈴編、作家出版社、一九五八年)に收められた(六七〜六八頁)。そこでは「葉逢春本」についてやや細かな報告がなされ、書名が『新刊案鑑漢譜三國志傳繪象足本大全』であること、首頁に「新刊通俗演義三國志史傳、東原羅本貫中編次、書林蒼溪葉逢春綵像」とあること、嘉靖二十七年鐘陵元峰子の序があり、その中に「書林葉靜子加以圖像、中郎翁葉蒼溪鐫而成之」の字句が含まれること、などが示されるとと

もに、書誌に關する幾つかの事項、即ち、全十巻二百四十段であること、毎頁十六行行二十字で、上部に圖がありその兩端に題字が附されていること、巻三・巻十の二巻が缺けていること、などが指摘されている。

臺湾の歴史學者方豪[8]がスペインとポルトガルを訪れ、マドリッド・エスコリアル・トレド・セビリア・リスボン各地の圖書館に赴いて漢籍所藏調査を行なったのは、一九五二年の夏、歸國後彼は『學術季刊』一九五二年一巻二期及び三期誌上に、「流落於西葡的中國文獻[9]」と題する調査報告を載せた。それは全文約五十頁にも及ぶ長文で、エスコリアル修道院に収藏されている漢籍について特に一章を立て、明刊本を中心とする貴重書の全てを網羅し書物ごとに解説を加えているが、こと「葉逢春本」に關してはペリオの調査報告を引いて極簡單に説明するのみで、情報としては單に、書名が擧げられ、序文の中の文字「嘉靖二十七年歳次戊申春正月下浣之吉鐘陵元峯子書」が紹介されているにすぎない。

以上、エスコリアル修道院を實際に訪れて『三國志演義』の版本を調査した三人の學者の報告を一瞥したが、當時はまだ小説の版本についての重要性があまり深く認識されていなかったためであろうか、戴望舒が書誌に關してやや具體的に輪郭を傳えているのを除いて、記述は概ね極めて簡單なものに止まり、内容はおろか書誌そのものについても、いまだ満足のいく報告はなされていないのが實情である。

(二) 書誌

ここで、筆者自身の調査結果に基づき、「葉逢春本」の書誌的事項について確認しておくことにする。

まず書名について。巻首に「新刊按鑑漢譜三國志傳繪象足本大全」とあるのが正式な書名と思われるが、各巻の初

葉と末葉にも書名を標出し、そこでは「出像」「全像」「通俗演義」などの言葉を随時加える他、一箇所だけ「新刊」に替わって「重刊」の文字を冠したものがある。(10)

全十巻のうち巻三・巻十を缺き、現存するのは巻一・二・四・五・六・七・八・九の計八巻。原寸は巻毎に微妙に異なり、最大は巻一のタテ二三三ミリ×ヨコ一四四ミリ、最小は巻六の二一七×一四二。書林、葉逢春刊。巻首冒頭に元峰子による明嘉靖二十七年（一五四八）の「三國志傳加像序」(11)を附す。序文の後ろに全十巻二百四十段の則題が三葉にわたって掲出され、續いて「三國君臣姓氏附録」と周靜軒の詩六首を、併せて一葉分に載せる。

本文は全て上圖下文。圖の兩端に長短不定の題字を標出、その字數は、兩端并せて最少四文字、最多十二字。下文は毎半葉十六行、行二十字。巻一初葉第二行めに「東原羅本貫中編次」、第三行めに「書林蒼溪葉逢春綵像」の刊記がある。毎葉版心に「三國志傳」の四文字とともに巻數と葉數を標示。本文中には多くの周靜軒詩が挿入され(12)、所々小字による雙行の註が見られる。また、巻首に一括して全巻の則題を載せる以外に、各巻の冒頭にも當該巻の則題を改めて掲げ、さらに本文中にも段落毎に則題を標出するが、それら三つの則題には時折字句に違いがみられる。

現存する全八巻分の総葉數は七百七葉、各巻本文の現存葉數は次のとおり。巻一（九〇）、巻二（八九）、巻四（八一）、巻五（八九）、巻六（八〇）、巻七（八九）、巻八（九二）、巻九（九一）。ただし、時折亂丁が見られ、巻八の第四九葉（一葉分）が重複、同じく巻八の第七七葉から八四葉（八葉分）が重複、さらに、巻九の第六六葉（一葉分）も重複している。よって、重複分を除く實質有用葉數は六九七葉ということになる。また、巻四第八二葉、巻六第十一葉〜二十葉、及び巻八第七五葉は缺葉である。

㈢ 流入の經緯

ところで「葉逢春本」はいつ頃どのような經緯でエスコリアル修道院に入ったのであろうか。この疑問に關しては、筆者がエスコリアル修道院で入手した「エル・エスコリアル王立圖書館の漢籍をめぐって」（原題「Los libros chinos de la Real Biblioteca de El Escorial」[13]）と題して書かれたグレゴリオ・デ・アンドレス（GREGORIO DE ANDRÉS）の研究によって、そのおおよそのいきさつを知ることができる。それによれば、本書はもともと、ポルトガル人の宣教師グレゴリオ・ゴンサルベス（Gregorio Gonzálvez）[14]が東南アジアでの布教活動中に買い求め、リスボンのスペイン大使ファン・デ・ボルハ（Juan de Borja）[15]を介してスペイン國王フェリペ二世（Felipe Ⅱ）に獻上したものであった。[16] 獻上の時期を具體的に確定することは難しいが、フェリペ二世の在位年間（一五五六〜一五九八）から推すと、遅くとも十六世紀の末には既に王の手に渡っていたと考えられる。本書の刊行が明の嘉靖二七年（一五四八）頃であるから、刊行後數十年以内にゴンサルベスによって購われ、エスコリアル修道院に收められたことになる。なお、フェリペ二世に本書を獻上する際、ボルハはそれに新たな洋裝を施し、豪華本に仕立てて獻上した。[17]

三　版本史上の位置

前章で詳しく述べたように、「葉逢春本」は、一五四八年という刊行年の早さもさることながら、刊行後まもなくスペインに移され、十六世紀以来一貫してエスコリアル修道院に保管されてきたという状況から見て、後人の改編を經ている可能性はなく、刊行當時の面貌をそのまま保っている極めて貴重な版本である。今後『三國志演義』の版本研究を進めるにあたっては、本書の内容について更に細かく檢討することが不可缺の前提になると思われるが、筆者

にはいまにわかにそれを押し進めるだけの準備が整っていない。ここではとりあえず、從來懸案となっている、版本史に關わる幾つかの問題に焦點を絞って、それが「葉逢春本」でどのような狀況にあるか、ということを報告しておくことにする。

(一) 關索・花關索について

既によく知られているように、民間傳説の世界に根強く生きていたこの二人の架空の人物が登場するか否かによって、『三國志演義』の版本は大きく系統が分かれるのであるが、結論から言って、「葉逢春本」には關索・花關索とも、一切登場しない。一方、これも既に周知の事であるが、明代萬曆年間以降建安で出版された『三國志演義』は、大抵二人のうちのいずれかを登場させている。二人の物語りがどの版本に最初にとりこまれたかという問題は、いまのところ不明とするしかないが、同じ建安出版の『三國志演義』であっても、嘉靖年間にはまだ關索・花關索の物語りを含まない版本も出版されていたのである。(18)

(二) 『孟德新書』燒却の描寫について

まず、「葉逢春本」の第五卷第二一則、「張松返難楊脩」の一段から、問題となる部分の原文を引く。

松曰、「此書吾蜀中三尺小童亦能暗誦、何為新書?此是戰國時無名氏所作、曹相盜竊以為己能、止好瞞足下耳。」脩曰、「丞相秘藏之書、雖已刊板、未曾傳播於世。汝言蜀中小児能誦、何相欺?」松曰、「公如不信、吾試暗誦

之。」脩曰、「願聞一過。」松將『孟徳新書』從頭至尾朗誦一遍、並無一字差錯。……曹曰、「莫非古人與吾暗合否？」遂命破板焼之。　（標點・傍點筆者）

劉璋の使者として曹操のもとに赴いた張松が強記を武器にして楊脩をやりこめ、曹操が『孟徳新書』を焼いてしまうくだりである。ここでポイントとなるのは、文中二箇所に現れる「板」の字である。傍點を附した部分、「雖已刊板」と「遂命破板焼之」は、「嘉靖本」では各々「雖已成帙」「遂令扯碎其書焼之」に改められており、「板」の字は「舊本」の誤りである旨の註釋が添えられている。[19]「嘉靖本」以前に刊行された版本は現在のところ未發見であるので、ここにいう「舊本」が具體的にどういったものを指しているのかは今のところ不明とするしかないが、右に見た如く、「葉逢春本」はまさに「板」になっており、「舊本」に直接連なる版本である可能性が高い。また、この部分に關する限り、「葉逢春本」の字句は殆んど「余象斗本」[20]に一致しており、兩者の間に何らかのつながりがあるように感じられる。ただ、この點については今後更に兩者の字句を仔細に檢討した上で結論を出すべきであろう。

(三)　關羽の最期に關する描寫について

周知の如く、關羽は麦城で孤立無援となり、わずかな兵を率いて敗走するが、ついに馬忠に捕えられ、孫權の前にひきたてられて關平とともに殺される。「葉逢春本」では第七巻第九則「玉泉山関公顕聖」の一段がこの場面を描く。問題となる部分の原文を引く。

孫權……急命推出、是歳十月中旬、関公於臨沮而亡、其子関平一時被害。……自父子歸神之後、関公坐下赤兎馬、被馬忠所獲、献與孫權、權就賜與馬忠騎坐、刀賜與潘璋、其馬数日不食草料而死。却説王甫在麦城中骨顔肉驚、乃問周倉曰、「昨夜夢見主公渾身血汚、立於其前、急問之、忽然驚竟。不知主何吉凶?」正説間、一人報呉兵在城下将関公父子首級招安。王甫大驚、與周倉登城視之、果是。　（標點・傍點筆者）

關羽の最期については、一九二九年の商務印書館影印「嘉靖本」のように、孫權によって殺害された經緯を明確にせず、玉帝に呼びもどされて天に昇ったとして多分にその神性を強めた描き方もあるが、[21] 右の原文が示すように、「葉逢春本」はそうではなく、關羽は關平ともども臨沮で殺害され、二人の首が麦城に運ばれて招安の道具に使われたことまでもはっきりと述べている。

四　結びにかえて

以上、スペインのエスコリアル修道院に十六世紀以來保管され續けている『三國志演義』の古版本、「葉逢春本」について、筆者自身の調査結果を中心に、關連する幾つかの問題も含めて一應の記述を試みた。實際に調査に費した期間は九五年三月七日から九日までの三日間、それも午前中のみという限られた條件のもとで行なった調査であるため、思わぬ粗漏があることを懼れるが、こと「葉逢春本」に關してはこれまであまり詳しい調査報告はなされていないので、敢えて拙文を草することにした次第である。拙稿を終えるにあたり、調査の過程で幾つか氣になる事柄があるので、みずからの今後の追究課題とするため、それらを疑問とともに簡單に書き留めておくことにする。

疑問の第一は、ペリオの調査報告についてである。先に示したように、ペリオは一九二九年の報告に、現存する「葉逢春本」は九部九巻であると明言している。しかし、全十巻のうち、現存するのは八巻のみであり、ペリオのいう九巻という數字とはくいちがっている。一方、既述した如く、戴望舒の調査報告には、現存八巻である旨、すでに明記されている。假にペリオの調査にまちがいがないとすると、一九二九年頃には全十巻のうち九巻が存在し、その後、スペイン内亂勃發の一九三六年以前に、何らかの事情によって一巻紛失したことになる。ボルハを介してフェリペ二世に獻上された際、本書は十巻全て揃っていたのであろうか。それとも、もともと破本のまま獻上されたのであろうか。

疑問の第二は、「葉逢春本」の巻首に附されている「三國君臣姓氏附録」について。「附録」は六行にわたって以下のように記されている。

魏國帝紀　后妃紀　臣紀
皇族紀　別　傳
蜀國帝紀　后妃紀　臣紀
皇族紀　別　傳　附傳
呉國帝紀　后妃紀　臣紀
皇族紀　附　傳

これが「附録」に關する記述の全てである。「君臣姓氏」とある以上、萬曆以後の多くの刊本がそうであるように、「君臣」の具體的な「姓氏」を擧げ、字や出身地等についての紹介があって然るべきところと思われるが、本書でそうなっていないのは何故であろうか。後述するように、本書は書名に「新刊」の文字を冠してはいるものの、重刊本である可能性も殘されている。從って、本書が重刊本であると假定すれば、初刊本には存在していた具體的人名等が再刊の際に削除され簡略化されたと考えることにより一應の説明はつくが、前提がはっきりしない以上、あくまで憶測の域を出ない。そこで注目したいのが、巻首に二度現われる「目録」という言葉である。既述の如く、本書の巻首には、元峰子の序文が二葉にわたってあり、葉が變った第一行めに「新刊按鑑漢譜三國志傳繪象足本大全目録」とあって、二行め以降に、全十巻の則題、三國君臣姓氏附録、及び周静軒詩が附されている。そして、静軒の詩が終ると、二行隔った同じ葉の最上部に「新刊目録畢」とある。つまり、「目録」という言葉が含む対象は全十巻二百四十段の則題のみではなく、「三國君臣姓氏附録」と周静軒詩の全てを包括したものと受けとれるのである。假にそうだとすると、問題の「君臣姓氏」の個別氏名等は、二百四十段全てが終った後、すなわち、第十巻めの末尾に附されていたのではあるまいか。巻十は現存しないため、現段階ではこれも推測の域を出ないが、もし假にこの推測があたっているとすると、「葉逢春本」は「嘉靖本」とも、又現存する萬曆以降の諸刊本とも異なる體裁を備えた版本であったことになる。

疑問の三番めは、先程も觸れたように、本書が果して新刊であるかどうかという點である。註(10)にも示したように、各巻首末に附された書名は、ただ一つの例外を除いて、多くは「新刊」の二文字を冠している。が、わずか一例であるにせよ、はっきりと「重刊」と銘打っている巻があるのは、やはり氣になるところである。客の目先を惹く

ために、實際には重刊であっても新刊と偽って刊行することくらいは、當時の書肆の常套に屬する行為であったろう。いずれにしても、本書が重刊本であるかどうかは、嘉靖二十七年以前の建安刊本の存在を裏付ける重要な點でもあるので、今後更に詳しく檢討する必要があるように思われる。

注

（1）關羽の息子・花關索が『三國志演義』の版本史に對してなげかける様々な問題については、『花關索傳の研究』（汲古書院、一九八九年）の金文京氏「解説篇」に詳しい。

（2）金文京「『三國演義』版本試探――建安諸本を中心に――」（『集刊東洋學』第六十一號　一九八九）、中川諭「『三國演義』版本の研究――毛宗崗本の成立過程――」（同上）、「『三國演義』版本の研究――建陽刊「花關索」系諸本の相互關係――」（『日本中國學會報』第四十四集　一九九二）、「『三國志演義』版本の研究――「關索」系諸本の相互關係――」（『集刊東洋學』第六十九號　一九九三）、上田望「『三國演義』版本試論――通俗小説の流傳に關する一考察」（『東洋文化』第七十一號　一九九〇）、周兆新「舊本『三國演義』考」（『三國演義考評』北京大學出版社　一九九〇）等參照。

（3）例えば鄭振鐸「三國志演義的演化」（『小説月報』二十卷十號、一九二九）では、「嘉靖本」とそれ以後の明刊本數種を比較した結果として、兩者の間には外見上多少の相違はあるものの内容にはさしたる變化はなく、從って「嘉靖本」が最も重要な版本である旨の發言がなされている。袁世碩「明嘉靖刊本『三國志通俗演義』乃羅貫中原作」（『東嶽論叢』一九八〇年三期）、陳鐵民「『三國演義』成書年代考」（『文學遺産增刊』十五輯）なども同様の見解に立つ。

（4）前掲金文京・周兆新論文、及び、陳翔華「略論余象斗與其批評三國志傳」（三國志演義古版叢刊五種一『雙峰堂本批評三國志傳』一九九五年刊）等參照。

（5）金文京『三國志演義の世界』（東方書店、一九九三年）第七章「『三國志演義』の出版戰爭」參照。

（6）對フランス戰勝記念のため、フェリペ二世の在位中（一五五六―一五九八）に建てられた宮殿兼修道院。一五四八年に完成。宮殿内の圖書館には十六世紀以前の宗教・歴史・地理に關する多くの貴重書が收められている。

（7）『天學初函』『資治通鑑節要』『類編曆法通書大全』『新刊徐氏家補註捷法鍼灸』『新刊耀目冠場擢奇風月錦囊正雜兩

科全集』『三國志』の六種。

(8) 一九〇九年杭州生れ。字は杰人。浙江大學、復旦大學、輔仁大學等で教鞭を執り、後、國立臺灣大學教授。東西文化交渉史に關する著作、『中外文化交通史論叢』『中西交通史』『中國近代外交史』などがある。

(9) いま、『方豪六十自定稿』下冊（臺灣學生書局、民國五八年六月）所収の同名論文による。

(10) 各巻首末に見える書名のタイプは以下の如くである。但し、巻五末のみは書名が記されていない。「通俗演義三國志史傳」（巻一末・巻二首末・巻四末・巻五首・巻七首）「三國志通俗演義史傳」（巻九首末）「通俗演義三國志全像史傳」（巻八末）「新刊通俗演義三國志」（巻八首）「新刊通俗演義三國志史傳」（巻一首・巻七末）「新刊三國志通俗演義史傳」（巻六末）「新刊通俗演義出像三國志」（巻四首）「重刊三國志通俗演義」（巻六首）

(11) 序文の全文を左に示す。

三國志、志三國也。傳、傳其志、而像、像其傳也。三國者何？漢魏呉也。志者何？述其事以為勸戒也。傳者何？易其辭、以期徧悟。而像者何？狀其迹、以韻畫觀也。蓋自皇帝王之既遠、道德功之既微、為伯為夷之相接踵、尚力尚詐之相比肩、而所謂綱常倫理民彝物則者、殆將蕩然於天下也。是故、陳壽取秦鹿失之、之後、漢鼎沸之、之餘、劉備之仁勇、曹操之奸雄、孫權之僭亂、其間行事之或善或惡、或邪或正、或是或非、或得或失、將以為勸、將以爲戒。而羅貫中氏則又慮史筆之艱深、難於庸常之通曉、而作爲傳記。書林葉靜軒子又慮閲者之厭怠鮮於首末之畫詳、而加以圖像。又得乃中郎翁葉蒼溪者聰明巧思、鐫而成之。而天下之人因像以詳傳、因傳以通志。而以勸以戒、是不必易之吉凶之明、書之政事之道、詩之性情之理、春秋褒貶之定、禮記節文之謹。而黎民之於變、四方之風動、萬國之咸寧、兆民之允殖、四海之永清、萬一其可致也、厥書之功、顧不偉哉。時、嘉靖二十七年歳次戊申春正月下浣之吉、鐘陵元峰子書。

(12) 現存する全八巻中に、合計四四首の周靜軒詩が挿入されている。巻毎の數は次のとおり。　巻一（四首）、二（六）、四（五）、五（五）、六（六）、七（七）、八（四）、九（七）。

(13) 掲載誌は『MISSIONALIA HISPANICA』である。發行年の確認を怠ったことが悔やまれるが、内容から推してここ三十年以内に書かれた比較的新しい記事であることは疑いない。

(14) インド・中國・マカオ・インドネシア・フィリピンなどで廣く布教活動に從事。マカオには十二年間在住し、初代日本

および中國の司教、メルチョール・カルネイロ（Melchor Carneiro）の代理をつとめ、教会や病院及び救貧院などを建立してマカオの發展に貢獻した。

（15）イエズス会の総長であった聖フランシスコ・デ・ボルハの長男。フェリペ二世の樞密顧問官。オーストリアのマリア皇妃の執事をもつとめた。

（16）この時獻上された本は「葉逢春本」のみでなく、前掲註（7）に擧げた書物のうち、『天學初函』を除く全ての本が、その時獻上されたものであったらしい。いずれも十六世紀中葉に出版された、資料的にも極めて價値の高いものである。なお、このうち、『風月錦囊』については、一九八七年に臺湾學生書局から影印本が出版されている（『善本戲曲叢刊』第四輯の一、王秋桂主編）。

（17）現存する「葉逢春本」八巻の裝幀は、いずれも堅固な皮表裝による洋裝本となっており、外見からは中國の古版本とは思えないほどである。うち、數冊の本文天地には、なおかすかに金粉が認められる。あるいは獻上の際に塗抹されたものであろうか。

（18）關索・花關索の物語りがいつ頃『三國志演義』に取り込まれたか、という問題を含め、版本史上における「葉逢春本」の位置付けをめぐっては、前掲註（5）の『三國志演義の世界』の中に興味深い假説が提示されている。

（19）この點については、前掲註（2）周兆新「舊本『三國演義』考」の冒頭部分で「嘉靖本」と萬曆諸刊本との字句の異同が細かに對照されている。

（20）萬曆二十年（一五九二）余氏雙峯堂刊『新刻按鑑全像批評三國志傳』。

（21）關羽の神格の強調については、前掲周兆新論文および、中川諭「嘉靖本『三國志通俗演義』における「關羽の最後」の場面について」（『文化』五四巻一・二號、一九九〇）などを參照。

附記　今回調査の對象としたエスコリアル修道院所藏の『三國志演義』「葉逢春本」については、かつて金文京氏より惠投された論文「『三國演義』版本試探」の「補註」によって初めてその存在を知った。今回の調査の出發點であった。また、本稿を草するに先だち、九五年六月三十日、「中國の文藝を樂しむ會」第二回例會において、「スペイン・エスコリアル修道院所藏漢籍類をめぐって――『通俗演義三國志史伝』を中心に――」と題して發表したが、その折、京都大學人文科學研究所の高田時雄氏よ

り、スペインに現存する漢籍について様々な指教を得た。フランスのペリオや臺灣の方豪がかつてエスコリアル修道院の漢籍を調査し、報告を書いていることを指摘されたのも同氏であった。兩氏に對し、厚く感謝の意を表したい。さらに、「葉逢春本」のスペインへの流入經路について誌したスペイン語の論文「エスコリアル王立圖書館の漢籍をめぐって」に關しては、本學文學部の平田渡氏に解讀をお願いし、氏の摘譯に全面的に依拠した。氏の御協力がなければ、當該部分を本稿に書き加えることはできなかった。併せて厚く御禮申し上げる次第である。

（本稿は關西大學平成六年度在外研究の研究成果の一部である。）